

3 年 B 組	『モチモチの木』の三役はきみだ！ ～登場人物像にせまり，音読で表現しよう～	須佐 宏
---------	--	------

1. 単元について

(1) 認識力を高め，自己の考えを伝え合う。

今年度，本校国語部では，研究テーマを「比較を通して，楽しく読み味わい，伝え合う力を高める」と設定した。「伝え合う力」に重点をおいたのは，「相手や目的を考えて順序よく話す力」や「話したいことの中心を筋道を立てて話す力」，「相手にわかりやすい表現で話す力」や「相手の気持ちに寄り添いながら聞く力」，「大事なことを聞き取る力」，「自分の考えと比べて聞く力」などの「伝え合う力」を高めることが生きてはたらく言葉の力を身につけることになり，自己を表現し，互いを理解し合う上で必要不可欠な力であると考えたからだ。また，その為の手段として，「比較」を取り上げた。比較という方法は，物の認識力を高めるために用いられる一般的・普遍的な方法であるが，これを国語科の学習の中で意識させていくことが認識力を高め，深い読み，読み味わいにつながると考えたからだ。認識力が高まることで，互いが根拠を明らかにしながら伝え合うことができ，対象をより深く認識していくことが可能となると考えたのだ。

(2) 音読を通じた自己表現

上記の比較に加え，私の授業では，音読することを効果的に活用していきたいと考えた。子どもたち，特に低学年や中学年の子どもたちの中には，声に出して表現することを好む子が多いが，国語授業の中で音読は，読解指導の道具的な扱いであったり，読解後のまとめの読みとして用いられることが多い。従来，いわゆる「声に出して読む」音読は，理解の領域に位置し，「聞き手を意識した」朗読は，表現の領域とされてきた。しかし，現在の指導要領では，両者を「読むこと」の領域にまとめ，「声に出して読むこと」として位置づけている。このことは，理解のための音声表現と表現のための音声表現が表裏一体であることを示しているといえる。実際に教材文を見ていくと，音声で表現することを前提として読むことで認識できる読みもある。音読を通して読み取ったことを伝え合ったり，音読そのものを聞き合ったりすることで，音読の力を伸ばしながら読み深め，「伝え合う力」を育てていくことにした。併せて，声に出して表現することを苦手とする子にとっても，自分の考えを音声表現することよりも音読表現することの方が抵抗がないように思われた。よって，発声練習や発音練習を効果的に用い，音声表現に対する苦手意識を取り除いていくことが，「伝え合う力」は育む土台作りにもなると考えていた。

(3) 本単元での教師の願い

今年度のそれまでの国語授業の中では，「きつつきの商売」「つり橋わたれ」「ちいちゃんのかげおくり」の3つの物語文について音読することを中心に学習してきた。①声の大きさ②強さ・弱さ③速さ④声色⑤間⑥読みまちがいの注意の6つの観点について，グループやペア，各自で工夫したい箇所に波線を入れて工夫内容を書き込み，読み方の違いについて話し合ったり，実際の音読を聞き比べたり，音読を聞き合って相互評価をしたりしてきた。そのような学習を続けてきたことで，声が小さすぎてほとんど聞こえなかった子が，少し聞き手を意識して読めるようになったり，工夫点として「強く」，「弱く」，「速く」，「遅く」，「大きく」，「小さく」などの具体的な工夫方法をあげながら，その根拠を示せなかった子が，友達の発表や書き込みを参考にして根拠を示せるようになってきた。一方で，課題として，大人顔負けの朗読ができる子もあれば，たどり読みがやっとという子もあり，がんばって読もうとするのだが，読み取ったことが音読表現に

いかしきれないという問題も明らかになっていた。初見の文章をある程度音読できる子は、学習を進めることによって表現力豊かな朗読に近づくが、たどり読み段階の子は、当然それには及ばない。しかしながら、意欲的な練習の結果は顕著に見られ、読み間違いが激減していた。読み取ったことが表れるような読み方を目指しながら、その子なりの上達も認めてあげられるような学習ができないかと考えた。また、「ちいちゃんのかげおくり」では、部分的な音読の工夫点は考えられるのだが、場面の状況をつかみきれないという問題も起こっていた。そこで、本単元では、「みらいの学習」で予定している老人福祉施設わかうら園への訪問時の出し物として「モチモチの木」を劇化することを前提にして、登場人物の会話文に音読の焦点をしぼり、①文章内容から自分で読み取ったことをノートに書き込む。→②学級全体で出し合う。→③音読の仕方について話し合う。→④③の話し合いをもとに会話文を表現しあい、相互評価する。という学習を展開した。これらの学習課程を経ることで子どもたちがより深い読みを実現し、自信を持って場面に応じた音読表現ができるようになることを願い学習を進めていった。

2. 実践の考察

(1) 導入について

本単元は、会話文に絞って考えていくことで読みを深めるねらいがあった。その為、劇化を前提にして読み進める事を子どもたちに投げかけた。これには、子どもたちも大変乗り気であった。市民団体での舞台経験やタレントオーディションを受けている子が数人おり、「すぐにオーディションをしよう。」という声があがるほどであった。子どもたちには、「中身が十分読めてないからまだまだ。」と話し、読み取りへの意識付けをすることができた。

(2) 読み取りの記入

これまで、「ここはどう読んだらいいか。」にばかり目を向けて、「音読の工夫」をノートに書き込んできた子どもたちに「文章から読み取ったこと」を書き込ませるのは至難の業であった。ほとんどの子が「音読の工夫点」と「読み取り」の違いがわからなかった。よって、1の場面では、まず目に見えてわかること（例：①段落も五つにもなった→豆太は五歳）を見つけて書き込みをさせた。それができるようになれば目には見えないけど文章からわかること（例④段落たった二人でくらしている→お父さん、お母さんがいない。例⑤段落六十四の今、まだ青じしを追っかけて、きもをひやすような岩から岩へのとびうつりだって、見事にやってのける。→じさまは、まだまだ元気）を見つけられるように促した。子どもたちにとって、「見えないもの」を読み取って記入することはかなり難しかったが、ある子が見つけたことを発表すると、人気テレビ番組「トリビアの泉」で番組参加者が納得して押すボタンの音をまねて机をたたき、共感する姿も見られた。また、それを自分のノートに追記し、自分も「見えないもの」を見つけようと意欲的に読み込みをする姿も見られた。なかなか見つけられない子には、前述のように友達に発表を聞いて追記している姿を褒め、書き込みができなくても安心して学習が進められるようにした。

(3) 読み取りや音読の工夫点の話し合い

本文から自分が読み取ったことを「読み取り」としてノートに書き込みをした後の話し合いは、やはりこれまでの「工夫点」のみを考えて話し合ってきたのとは中身が違っていた。今回の学習では、「読み取り」についての話し合いと「音読の工夫点」についての話し合いが2本立てになっており、二度手間ではないだろうかと思ったこともあった。「読み取り」が深くなってくるとそれが自然と「音読の工夫点」につながっていくこともあり、この場面で、どこまで突っ込んだ話し合いをしておくことがいいのかと考えさせられる場面もあった。しかし、今回の学習方法は効果的であったと考えている。それは、今回の学



習での「音読の工夫点」の話し合いでは、発言者に対し執拗に「証拠あるか。」と問いただしたのだが、自分の「読み取り」を根拠にして「音読の工夫点」を話すことができおり、根拠がはっきり示されることで、聞いている子も反対意見を述べやすくなっていったからだ。学級内に友達の意見に対して「つつこみ。」という言葉の流行を生み、活発な意見交換ができた。また、子どもたちも証拠（根拠）を用意して話すようになった。1回目の「読み取り」の話し合いがあることで、文章

構造も認識でき、それが「音読の工夫」についての話し合いに生かされていた。

（４）音読の評価

音読の評価については、相互評価と自己評価を中心とした。ただ、聞き手の力（評価意識の高低や聞く力、評価の表現力）によって、音読の評価が大きく違ってくる考えたため、相互評価の相手については、自由選択や隣り合わせ、前後、また、時間の許す限り次の相手を見つけて相互評価するなどパートナーのバリエーションを豊かにし、いろんな友達と相互評価する機会をもった。そのことで、安易な◎や大盤振る舞いの的な評価を減らし、自己の音読表現を高めようとする姿勢を生み出すことができたと感じている。教師側の評価としては、読み声よりも相互評価シートへの記入内容が中心になってしまった。

（５）比較について

比較については、「モチモチの木に対する豆太の昼と夜の態度の違い」②「こわくておびえている豆太とじさまの異変に気づき医者様をよびにいこうとする豆太」③「灯りのともったモチモチの木を見たときの医者様と豆太の反応の違い」④「勇気を出した豆太と最終場面の豆太」の４点を意識させた。特に②については、１１月の研究発表会の授業で扱い、⑭段落にある「じさまあっ。」と⑯段落にある「じさまっ。」の読み方の違いについて考えさせた。速く読むのがいいか遅く読むのがいいか、また大きく読むのか小さく読むのか、伸ばすのか伸ばさないのか、両者を実際に音読しながら読み比べ、「じさま」を呼ぶという点では同じ言葉であるが、⑭の方は、父親が頭をぶっさかれたような（１場面本文より）熊が本当にきたと信じていて怖がってじさまを呼んでいること、⑯の方は、熊じゃないことがわかったが、体を丸めてうなっているじさまを心配して呼んでいること、文字表記としての「まあっ」「まっ」の違いから考えられることなどについて活発に意見を出し合って話し合うことが出来た。また、上記以外でも、音読の仕方が分かれる箇所では、音読表現を聞き比べることで、話し合いをより活性化することができた。

（６）着目児について

本単元では、単元を通して♥♣♦の４名の着目児を設置して変容を見取ってきた。♥児童は、積極的な発言ができるが、声量が少なく、話すときの一文が長いことやスローテンポで語尾に「ねえ」をつけるため聞き手に最後まで聞きとってもらえないところがあった。全発言とは言えないが、しっかり伝えるように促すと声量を増すことができた。一文の長さやテンポなどすぐに改善できるものではないが、語尾に気を付けて話すようになり、本時でも、♥ちゃんが発言したことに対して他の児童から「♥ちゃんが言うように・・・」「♥ちゃんにつけたしで・・・」という声が聞こえてきた。このことから聞き手に少しずつ伝わりつつあることが伺えた。♣児童は、か行の発音に不明瞭な点が残っており、友達に聞き返されるのを嫌い発言が少なくなりつつあった。本単元でも、前単元に引き続き、発声練習を意識的に入れ、改善を促すことで積極的な発言が引き出せるよう学級全体で取り組

んできた。まだ、積極的な発言は戻っていないが、相互音読では、表現豊かに音読した。◆児童は、学習への取りかかりに時間を要し、文章表現にも抵抗感があつて、書き出せないことも多い。ただ、音読表現は好む傾向があるため、よりよい音読をすることを目標として書きこみしていけるようにしたかった。本単元でも、初発の感想や読み取りを書くのにはかなりの時間を要した。しかし、本時にかかわる「読み方の工夫」については4つのうち3つは何とか自力で書き込めた。また、残りの1つについても、友達の意見を参考にし書き込むように促したことで、友達の発表をしっかりと聞き、自分なりに書き込みをすることができた。◆児童は、本単元の「劇化」で力を引き出したかった児童である。それまで集中力を欠くことが多く、本来の力を出し切れずにいたが、単元のスタートから「劇化」に強い関心を持ち、単元の終了まで意欲的に学習に参加することができた。音読の練習にも力を入れ、本時の最後にも練習量の豊富さを感じさせる音読を披露した。

3. 今後の課題と展望

今年度、私の国語授業では、「比較」を意識させながら音読することを効果的に用いることで、楽しく読み味わい、伝え合う力を高められるような学習を進めてきた。音読の指導は、学校を挙げて取り組み、発達に応じて段階的に積み上げる形で実践されている場合が多く、本校のように、単年による学級編成かつ独自の研究課題を追究する形では効果的な学習は難しいように思われた。しかしながら、子どもたちの変容から単年であってもある程度の成果を得られたと感じている。呼名してもほとんど声が聞こえなかった子がいたが、その子は見違えるほど声が出るようになり、クラスのみんなに認めてもらえたことで自信を深めた。また、ある保護者からは、「宿題の本読みが、授業でする音読を想定して読めており、毎日継続して練習してきたことで、随分読めるようになった。」という声もいただいた。ただ、子どもたちの読みが変わってきていることは私も感じているが、時間的な制約のもと、全員の音読の変化を確認しきれていない。それは同時に、評価の段階で、児童の相互評価に頼らざるを得ないということになる。限られた時間の中で、子どもたちの音読の変化をどう見取っていくかは今後の課題である。

また、今回の学習では、音読と比較を授業の中で効果的に活用し、積極的に「読み」を試行させることで、読み手の上手下手とあまり関係なく、授業が活性化し、活発な話し合いが展開された。活発な話し合いが子どもたちの読みを深めていると感じるのだが、やはり実際に読みの違いを明白な音読表現の違いとして表現できるようにしていきたいと考える。どの学級においても個々によって音読技術の差は大きいと考えられるが、より効果的な音読技術の向上方法も見つけていきたい。

さらに、上記にもあるように活発な話し合いが行われるようになると、どうしても盛り上がり、教材文から離れて想像の世界で議論が進められることがあった。常に本文に立ち返らせて話し合いを進めていくことは今後も課題である。

また、物語では、視点の違いによって話し合いがまったく平行線をたどることにもなる。低学年でも視点という言葉を用いながら実践している例も目にするが、今回は視点については簡単に触れただけであった。視点をどう意識させていくかは私の課題のひとつである。

4. 実践研究テーマの設定

上記のようなことから、単年での積み上げの難しさを承知の上で来年度も継続して音読指導を中心にした学習展開を模索していきたいと考えている。また、音読指導というと物語教材中心になりがちであるが、説明的文章でも音読の指導を効果的に活用できないか考えていきたいと思う。